

樹木希林の家

東京都港区

設計 黒川哲郎＋ハードウェア

施工 渡部建設





東側外壁をみる 外壁 コンクリート打放し防水剤ロープ塗り こちら側は住宅部分の入口となっている
事務所側車庫よりみた事務所入口

撮影 本誌写真部

制作・著作 ハードウェア
設計 建築 黒川哲郎+吉川和博
構造 浜宇津構造設計室
設備 協設備設計事務所
家具 岩沢晴彦+黒川哲郎

施工 渡部建設

敷地面積 130.93㎡

建築面積 78.02㎡

延床面積 289.92㎡

地階 59.17㎡

1階 77.19㎡

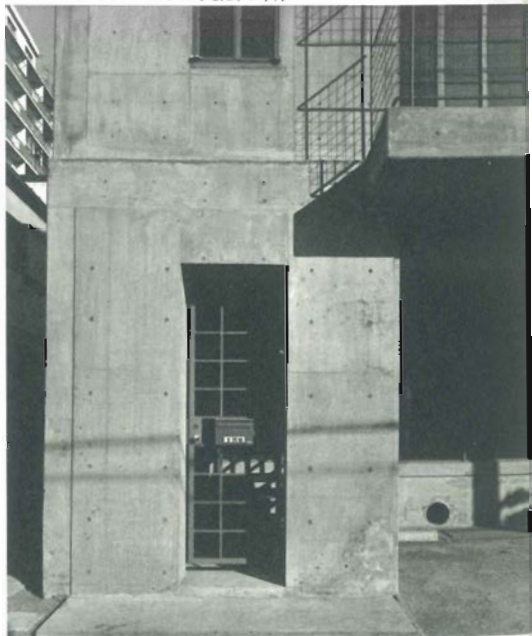
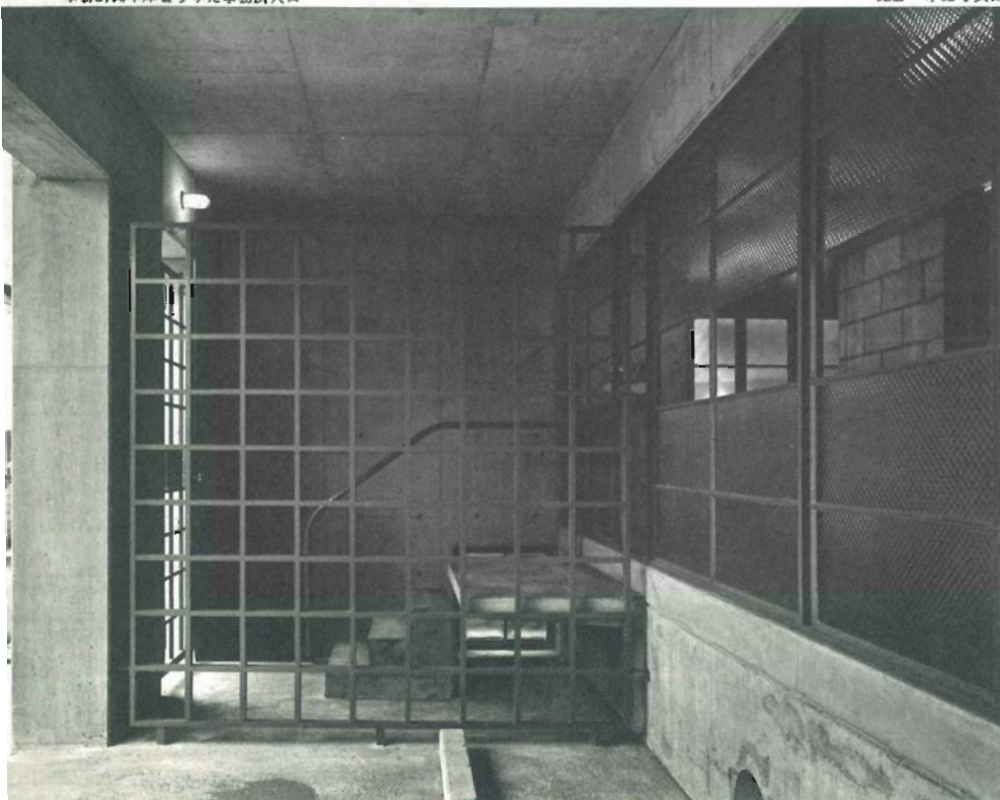
2階 76.78㎡

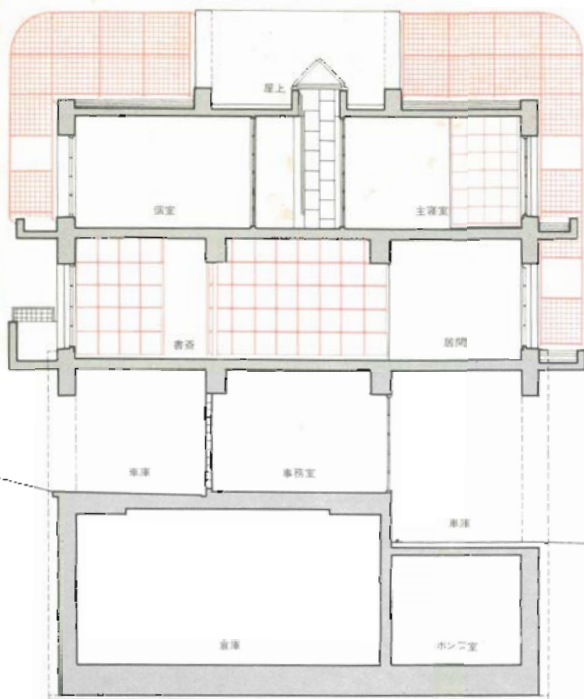
3階 76.78㎡

構造 鉄筋コンクリート造

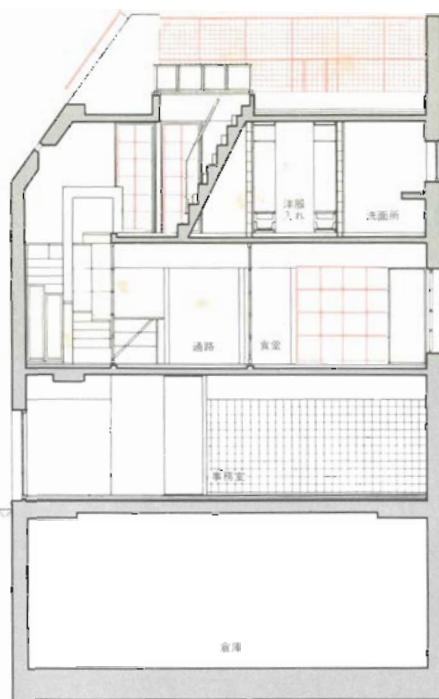
工期 1977年12月～1978年10月

西側事務所の入口 右手は事務所の車庫





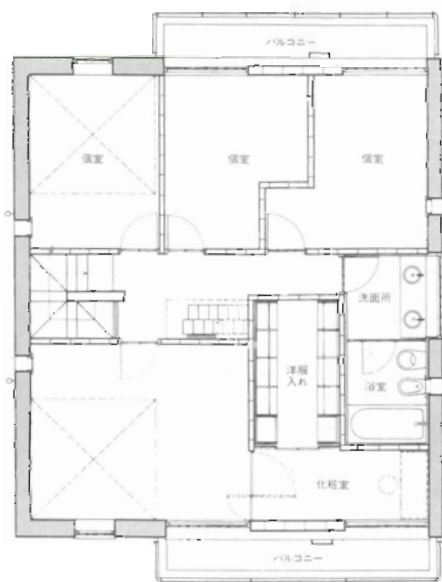
東西断面図



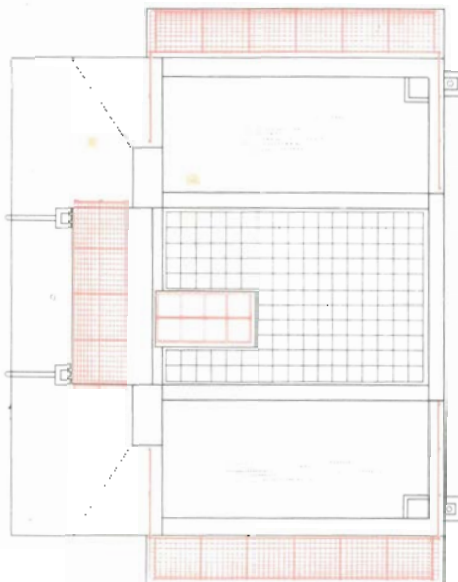
南北断面図 縮尺 1/150



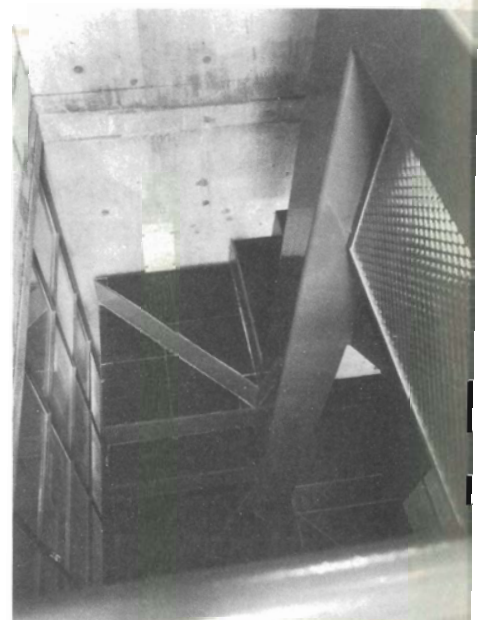
屋上: トップライトが開いている状態



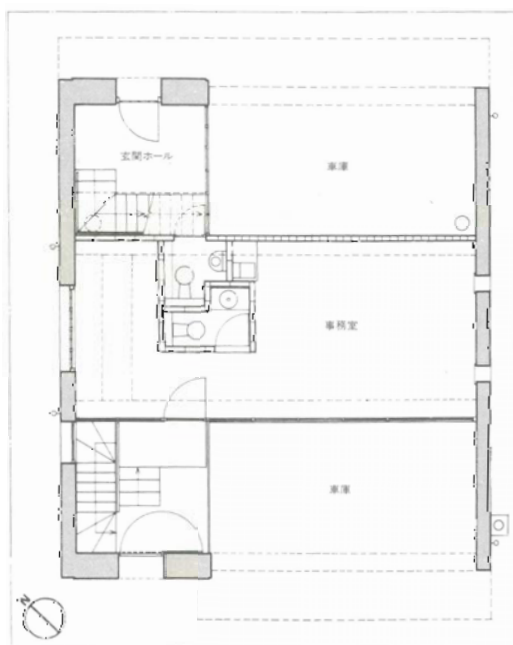
3階平面図



屋階平面図



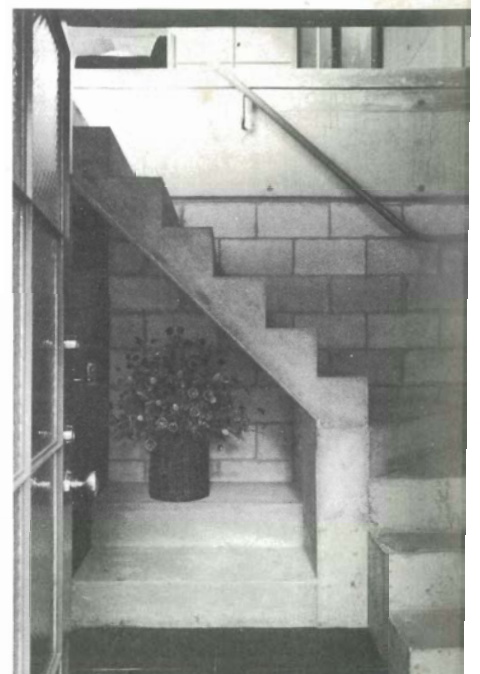
階段室を見落ろす 段板 玄昌石



配置・1階平面図 縮尺 1/150



2階平面図



玄関



居間東方向をみる 右手のスクリーンは食堂と居間を分割している 正面奥は書斎となっている
台所をみる



石は石らしく、
鉄は鉄らしく、
ガラスはガラスらしく
コンクリートはコンクリートらしく
ベニヤはベニヤらしく

それぞれのタチや持ち味を生かした建物を……どうかひとつ……よろしく、そのかわりといっちゃナンですが、私どもは人として、人らしく住みこんで行きます……から。

この家の中心になる階には、ドアがひとつもありません。そして間仕切りはパンチメタルです。美人に写すとき、カメラに沙幕を張ります。ちょうどそんな感じです。昼は昼の陽を、夜は夜の灯を通して、家族の様がひそやかに伝わってきます。まだ幼い児が、向こうから母親をにらんでいるの感じます。

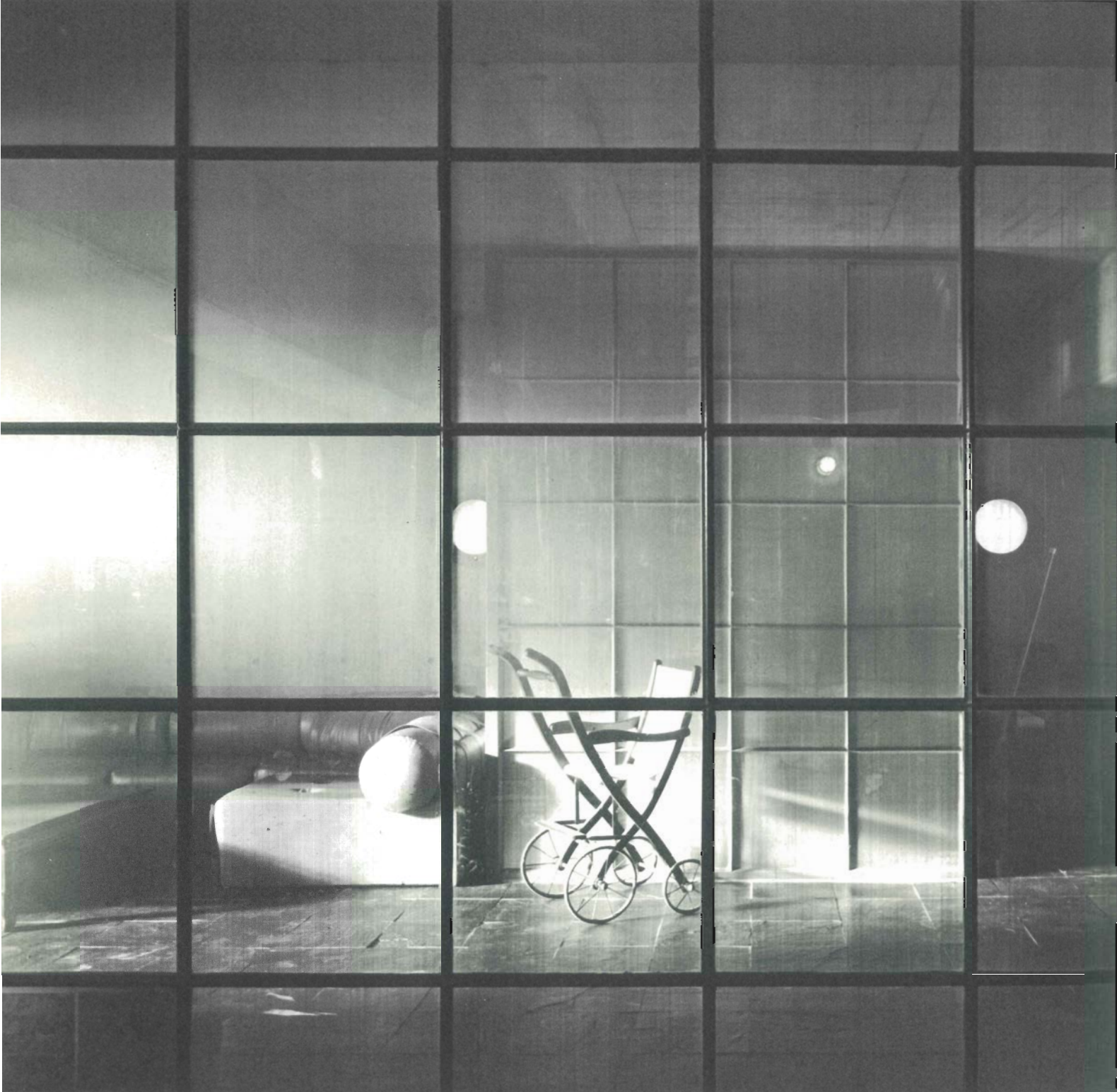
どんな荒れ果てた都市でも、人が生きて動いているということはステキです。どんな立派な建物でも、そこに人間の息づかいがなければ涙をさそいます。

それぞれの素材がうれしそうな新居で、さて私は、家に住まわせられるんじゃないかと、住みこなそうと、日々の生活をはじめています

（樹木希林）

右ページと隣階段室よりみる 右手が居間 正面奥は台所
左手は書斎となっている この階にはドアがひとつもない





食堂からスクリーンを通して居間をみる アルミバンチメタルのピンホール効果によって部屋を間仕切るという感じとすみずみまでひとつの空間としてとらえようという相反する要求を同時に満たしているスクリーンはアルミバンチメタルを2mmのガラスでサンドウィッチしたもの

東西2箇に北下りの道路をもち、さらに全体が西下りという敷地のため、道路斜線と北側斜線の3種の規制。合わせて6つの傾斜面を、この家ははじめからはらんでいた。

設計は、まずこの点の交通整理をして、必要なアクティビティをもった断面構成をつくり出すことから始まった。デザイン的には、小さなスケールで、垂直・水平を繰り返すことによりそれを強調し、曲面を加える一方、斜面を小さくくだいて行った。

地階はコンサートルーム、1階はプロダクション事務所、2階はパブリックな居室、3階はプ

ライベートな居室、そして屋階はルームアウトサイドといった明快なワンフロア・ワンファンクションとなっている。地階は4周の土を無限の厚みをもった壁として感じとれる部屋とするために、敷地の落差を利用して丸窓をとり、自然の光をわずかにもちこみ、地下という座標をつくっている。1階は、仕事場を挟んで、東側に住宅用の、西側に仕事用のパーキングと玄関が設けられている。仕事場の東面にはガラスブロックを、西側にはラフワイヤーガラスを使うことによって、仕事場全体を光の滞留する空間として、東西の道路に空気を通わせている。2

階は、ドアがひとつもなく、居間・書斎・食堂・厨房が、スクリーンによって間仕切られている。このスクリーンは、アルミバンチメタルを2mmガラスでサンドウィッチしたもので、外光・照明の変化に敏感に反応して、錯視的な世界——たとえば多重露出の写真のような——をつくっている。3階は、2階とは対比的にコンクリートブロックでがっちりと同仕切り、ドアをガラス戸としている。ここでは上方からの光を多様な姿で取入れている。昼近くになると、屋階への階段のトップライトから入る光は、北側の壁にバウンドして、突然のように階段室を



床 玄昌石貼り 壁・天井コンクリート打放し



3階洗面・浴室をみる 床・壁 玄昌石貼り



3階個室



2階の連続空間をみる 右手は食堂 正面奥は書庫 左手のスクリーンの箱は階下室となっている

食堂

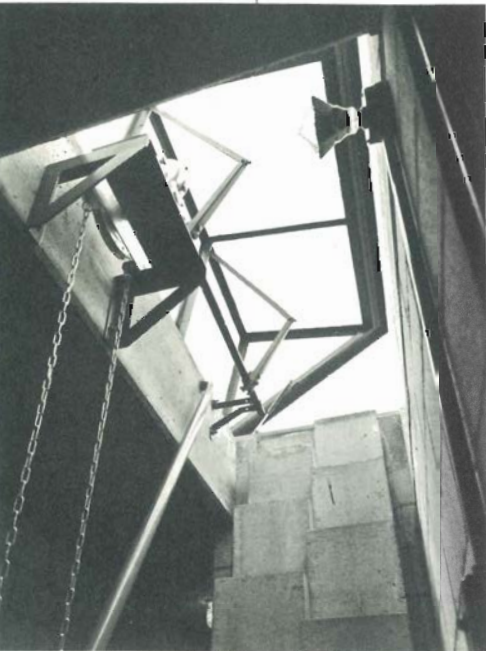


浮きたたせる。

外部のブラントネットは、手摺とグリーンエンパイロメントのための装置を兼ねているが、外部の吹抜けといったかたちで垂直の連続感を与える役目もしている。屋階は、将来ガラス張り、風呂つきのグリーンルームがつけ加えられる予定である。

構造は、斜線のかかる部分を横力の大部分を受けける面的なところとしてまとめ、開口ゾーンの線的な水平、垂直の印象との対比をつくり出している。いつも構造の打合わせのときは「力学的に健全であること」をモットーとしているが、

そのため、各部分での解決法が、全体としても脈落とバランスをもち、エレメントとしても浮きたちすぎもせず、かといって隠されてもいないという必要がある。しかも余分なものをできるだけ削落とし、それを外周部におこうとすることも同時に行なうので、極めて難しい欲張った作業になってしまう。しかし、構造を建築の下僕にせず、やはり「力」の表現の位置を保ってやりたいと考えている。さもないと建築はますますただ日常的のためだけのものに、あるいは反対に非日常だけを求めて行くものに堕してしまいそうな気がするからだ。（黒川哲郎）



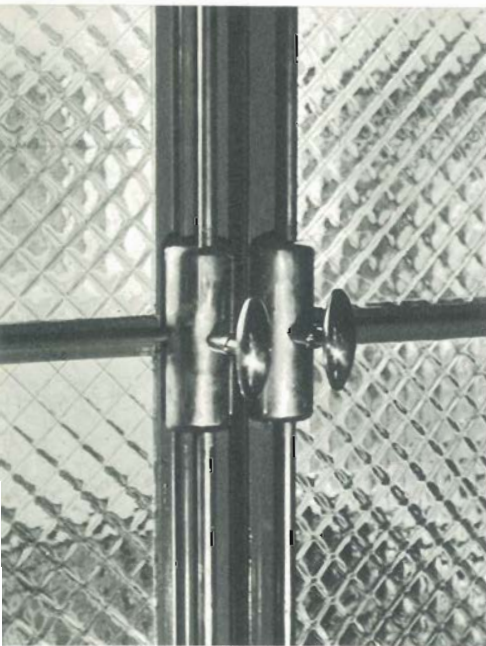
可動式トップライト 脱逃用の階段で屋上へ出られる



ガラスブロック1個のトップライト



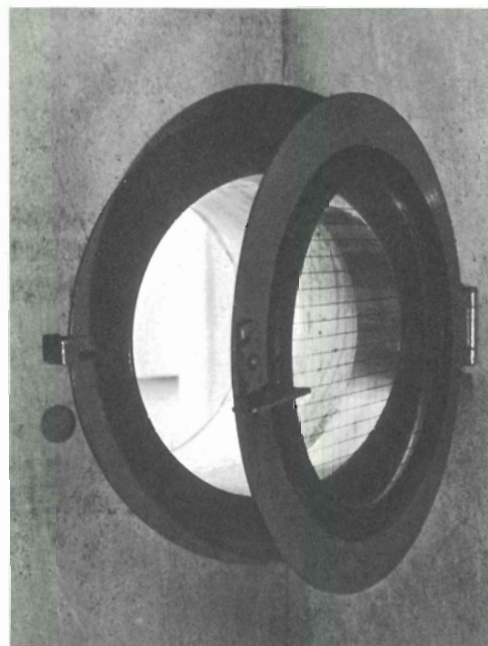
3階個室のトップライト



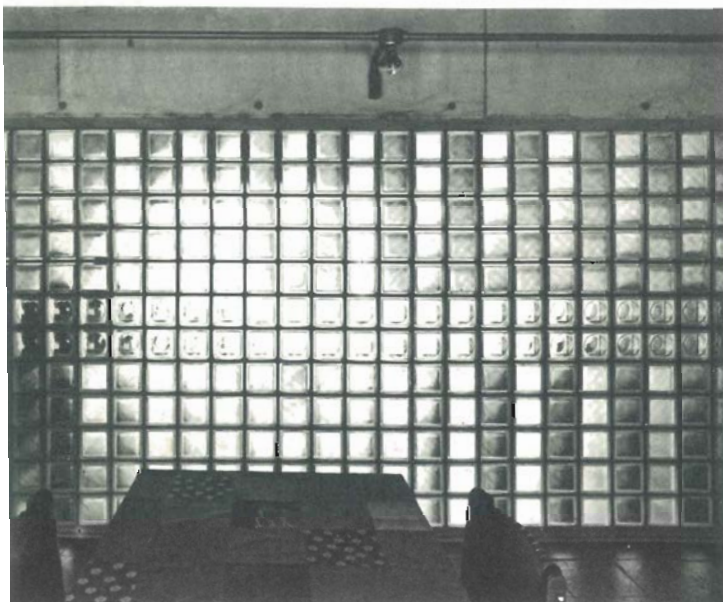
デザインされた御物製のクレモン



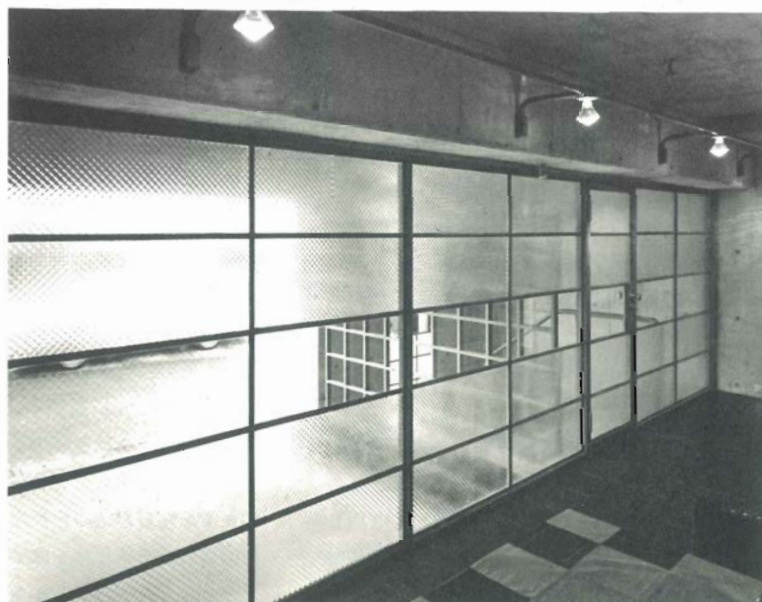
3階個室の把手



丸窓 鉄板を加工したサッシ



事務室内東側の開口部 ガラスブロック 照明 丸ボックス+モーガルソケット+くらプレート



事務室内西側の開口部 網入り透明および型ガラス